

「走れメロス」をめぐる 政治問答

筑波大学名誉教授 中村 紀 一

◆経歴◆

- 1966年 国際基督教大学大学院行政学研究科修了(行政学修士)
- 1966年 財団法人東京市政調査会研究員
- 1971年 千葉大学教育学部講師
- 1982年 千葉大学教育学部教授
- 1986年 筑波大学社会科学系教授
- 現在 つくば市行政経営懇談会、情報公開・個人情報保護審査会委員

1. はじめに

- A. 元大学教員(政治学担当)
- B. 教え子(新聞記者政治部)

- B. 先生、退官してから10年以上経ちますね。
- A. そうか。そう言えば、最終講義は『「走れメロス」の政治学的考察』だったな。
- B. 社会に出て政治が少しはわかる40代に入ったので、もう一度最終講義の内容をお聞きしたいと思ひまして・・・。
- A. 君は太宰治の「走れメロス」を読んだことがあるよね。
- B. もちろん。中学時代の教科書に載っていたからね。
- A. それじゃあ話がはやい。早速本題に入ることしよう。

2. メロスには政治がわからぬ

- A. 冒頭近くに「メロスには政治がわからぬ」という文章があるのに気付いたかね。
- B. 中学時代は見逃したけれど、先生の講義の後、読み直したのを覚えています。
- A. 今さら太宰に確かめることはできないから、この創作の中から、なぜ、メロスには政治がわからないのか、政治がわかるとはどのようなことなのかを考察すること。これが最終講義のテーマだった。そして、それを解く第1の鍵が「メロスは、村の牧人である」という言葉だ。

3. メロスは、村の牧人である

- A. ここに、農村と都市における生活意識を比較した表-1がある。各項目にパラパラと目を通して、ムラ共同体と都市社会の違いがよくわかる。メロスは暴君が権力をふるう都市社会とは無縁の狭域孤立的で静的な村に牧人として生きているということだ。

■表-1 村と都市の生活意識の相違

項目	農村型	都市型
1. 住民の接触	全人的接触	目的接触
2. 生活の構造	伝統的構造	合理的構造
3. 集団の構成	小集团的	大集团的
4. 生活の単位	家族主義的	個人主義的
5. 人間の関係	道義的關係	機械的關係
6. 住民の構成	同質的住民	異質的住民
7. 集団の接触	狭域孤立的	広域融通的
8. 生活の規範	慣習の支配	法的支配
9. 集団の性格	静的な社会	動的な社会

磯村英一・星野光男編『地方自治読本』(東京、東洋経済新報社、1966) p.106より

- B. すると、メロスは政治(権力)を知る必要も、関心をもつ必要もないということですね。
- A. そう。「日明けて耕やし、日暮れて止む」。いわば伝統型無関心の世界だね。そんなメロスが、突然暴君ディオニスが君臨する都市にやって来たのだから、カルチュア・ショックたるや大変だっただろう。この辺を表-2を使って説明してみよう。

■表-2 メロスとディオニスの人間観・倫理観

	人間観	性善説	性悪説
倫理観			
心情(信条)倫理		メロスの世界	-
責任(結果)倫理		-	ディオニスの世界

著者作成

4. 信じられているから走るのだ

- A. メロスはムラ共同体の中で「家族」と親しみ、「全人的接触」を通じて人間の善意と信実を尊む世界で生きてきた。そこから自然と「性善説」の人間観を身につけている。
- B. 人を疑うこと、嘘をつくことが一番きらいな理由ですね。
- A. あわせて、物事を結果（成果）で評価するよりもそれに関する善意とか誠意を重視する心情主義的倫理観をもっているように思える。そこで第2の鍵は「……信じられているから走るのだ。間に合う、間に合わぬは問題ではないのだ」という言葉だ。メロスの心情がよく表現されている。
- B. でも、その後に「人の命も問題ではないのだ」じゃ、人質セリヌンティウスがかわいそうですね。ちょっと政治的に無責任な気がします。

5. 三日目には……帰って来い

- A. 一方、シラクス市では、暴君が殺りくを繰り返しながら強権をふるっている。ドイツの政治学者が「真の政治理論は必ず性悪説をとる」と述べているが、暴君の「人間はもともと私慾のかたまりさ。信じてはならぬ」という人間不信の表明は、異質的住民が、それぞれの目的達成を求めて蠢き合う都市社会が育んだものかもしれないな。
- B. こうした暴君のふるまいにメロスは激怒して短剣を持って王城に入る。そこで「単純」なテロリストとして捕まるんですね。
- A. そうだ。それがきっかけで「走れメロス」の感動的な物語が展開される。
- B. だけど、ここでも暴君の言葉はきびしいですね。「……三日目には日没までに帰って来い。おくれたら、その身代わりを、きっと殺すぞ」。
- A. そこに政治理解の第3



出典：偕成社

の鍵がある。「結果に責任をとる」（責任主義的倫理観）というのは、こういうことなんだ。

- B. でも、メロスは約束どおり帰ってくる。
- A. 「メロスの勝利」に終わるのは創作としてはよくできている。

6. 万歳、王様万歳

- B. 人質と抱き合うメロスに暴君が「おまえらの仲間の一人にしてほしい」と近づき、群衆の「万歳、王様万歳」のうちに大団円。何かポピュリズムを目の前に見ているようですね。
- A. 確かに万歳だけでは、一時の「不毛の興奮」で終わってしまう。暴君の政治的責任が問われ、メロスの政治的成熟も必要だろう。
- B. でも、人の友情と信実を謳ったあげく、王を磔^{はりつけ}なんてことになったらそれこそ興ざめじゃないですか。結局メロスは政治がわからぬままに終わってしまうんですか。

7. 勇者はひどく赤面した

- A. いや、太宰が少しだけヒントを与えてくれているように思う。それは「まっばだか」だったメロスが最後にマントを着て赤面したことだ。その意味がわかるかな。
- B. 寒かったとか、恥ずかしかったとか……。
- A. 子どもの裸は恥ずかしくないけど、大人になるといろいろ隠したいところも出てくる。メロスも少しは社会的に大人になったことを太宰は伝えたかったのじゃないかな。「政治の世界は大人の世界」（岩永健吉郎）だし、「政治の予想する人間像というものは、昔からあまり美しくないことに相場が決まっている」（丸山真男）。だからメロスは裸体をマントで隠したのさ。それでも、「信実」に生きたこの若者は初々しさを失わず、マントを着たことにひどく赤面した。見事な終わり方だね。
- B. 先生、うまくまとまりましたね。
- A. いや、シラクス市の政治改革、メロスの政治教育はこれからで、「走れメロス」は政治学的には未完だね。